

就任にあたって



消防庁長官 黒田 武一郎

8月1日付けで消防庁長官に就任しました。極めて重責ですが、我が国の消防行政の推進に全力を尽くしてまいりますので、よろしく願いいたします。

私は、兵庫県尼崎市の出身です。就任前の7月末に両親の墓参りを終えて、地元の銀行勤めの弟と神戸の新在家界隈で夕食をとった後で、少し散歩をしました。JR六甲道駅の近くには大きな公園があり、近所の高層マンションの住民らしき親子連れで賑わっていました。足を止めて眺めていた私に、弟が、これは阪神淡路大震災後にできた空間の一つであることを教えてくれました。それからひとしきり、震災当時の思い出話となりました。そして、弟からは、行政もいろいろと手を打っているようだが震災の記憶がかなり風化していると聞かされ、その理由についても語り合いました。

あの震災からもう23年が経過しました。当時まだ幼かったために記憶がない年代も加えると、住民の4分の1程度はそもそも震災を直接的に体験していないといえそうです。しかも、阪神間の住民は移動が比較的激しいですから、他の地域からも震災を知らない方々が多く移り住んできます。この2点だけからしても、現在の住民のかなりの割合が震災を直接に知らないと考えられ、そのことが風化の大きな原因ではないかとなりました。さらに、弟の「自分もそうだが、人は自分の気持ちと折り合いをつけて生きていくためには、本当に苦しかったことは忘れないとやっていけないからではないか」との指摘が胸に突き刺さりました。

我が国は、阪神淡路大震災後も中越地震、東日本大震災、熊本地震等といった大きな地震はもとより、豪雨、噴火、大火災等に見舞われてきました。この9月6日には、平成30年北海道胆振東部地震が発生したばかりです。そして、それらへの救助、復旧・復興といった懸命の対応が終わってしばらくすると課題となるのは、風化の問題です。まず、住民一人一人が、常に自助の気持ちを忘れずに、いざというときに備え続けることが大切です。行政側においても、防災や減災に資するまちづくりに力を注ぐことはもとより、住民の災害対応力を高めるとともに地域の災害の記憶を如何につないでいくかが大きな課題です。

しかし、一方で、人は弱い存在です。つらい大変な体験であればあるほど、それを忘れないと日々の一歩が踏み出せない、あるいは想定したくない災害には目を閉じていたい、ということも私たちの正直な感覚かもしれません。だからこそ、国民の生命と財産を守るために日々の備えを怠らず、ことが起こると即応するという使命を有する特別の組織が必要であると、改めて強く思い至ったところです。全国の消防職団員の皆様に対する国民の期待や信頼の原点もここにあると考えます。

私が40年間所属する明治神宮武道場至誠館の名誉館長の座右の銘に「終即始」という言葉があります。本来は、武道における「残心」を意味するものですが、ことに当たって全力を尽くし切った瞬間、ぬかりなく次に起こりうることへの準備を始めているという教えとしても有意義です。この言葉を胸に、一日一日努力してまいります。

就任にあたって



消防庁次長 横田 真二

7月27日付で消防庁次長に就任した横田です。よろしくお願いたします。これで消防庁に勤務するのは4回目となります。前回は述べさせていただきましたが、最初の課長補佐として勤務した時には、阪神淡路大震災があり、2回目の防災課長の時には東日本大震災がありました。そして3回目の国民保護・防災部長の時には熊本地震と、偶然ではありますが、そのような出来事が重なりました。

そして次長に就任前の7月におきた平成30年7月豪雨、就任してまもなく、発生した最大震度7の平成30年北海道胆振東部地震では、多くの方が犠牲になりました。お亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の意をささげるとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。自然相手とはいえ、もうこれ以上大きな災害がおこらないことを心から祈っております。両災害においては、地元の消防本部や消防団のみならず、広く各都道府県から緊急消防援助隊が消防庁長官の指示（東日本大震災以来二度目）または求めにより出動し、人命救助など大きな活躍をしていただきました。活動された皆様に心より感謝申し上げます。

さて、今年の夏は、猛暑が続いたことに加え、台風が例年にない動きを見せ、次々と上陸するということがおこりました。

平成30年7月豪雨の当時、私は内閣官房（危機管理担当）にいたことから、政府のリエゾンとして被災地広島県に一週間行かせていただきました。その経験はたいへん貴重なものとなりました。

広島県では予想以上の豪雨のために県内の多くの場所で土砂崩れが発生し、道路や線路が流され、断水が発生していました。

私以外にも審議官級を含む多くの各省庁の方々がリエゾンとして広島県庁につめていました。

私は、国からのリエゾンの間での意思疎通を十分に図るため、内閣府の方々といっしょに毎日夕方にリエゾンが一堂に集まって情報交換を行う場をつくらせていただきました。各リエゾンの皆様方には快くご協力いただき感謝しております。

それにより、見逃しがちな課題や各省庁にまたがる課題などについて整理がされていったと思っています。広島県の危機管理監など幹部の方々とも情報が共有できるようになり、なんとか被害の全体像がつかめていき、災害対応の方向性も定まってきたように思います。

実際に被災地に行ってお聞きした町長さんの「次に雨が降ったときのことが心配でならない」という真に迫った言葉がいまだに耳に残っています。

近年災害は多様な形をとるようになっていて、いつおこるかわからない状況にあります。そのような中で日々、地域の安心安全のために昼夜を問わずご尽力されている消防職・団員の皆様への活動には心より深く敬意を表するしだいです。

平成30年7月豪雨では、お一人の消防団員の方が、また8月10日に群馬県で起きた消防防災ヘリの墜落事故では9名の方々の尊い命が失われました。心よりご冥福をお祈りいたします。消防の活動においては崇高な使命の下、活動される職・団員の方々の安全が第一だと考えております。

二度とこのようなことが起こらないように、皆様とともに微力ながら取り組んでまいりたいと考えておりますので、ご協力とご理解をなにとぞよろしくお願い申し上げます。